り、夜はいつでも三四時間の睡眠の外は、孜々として研究に從事したものである、かくして此の時期の中に獨・露・佛の諸國語で發表した研究は二十一種に及んで居る、中でも有名なのは此の後續々公にせられた「トルコ國民文學」の第一卷（一八六五年）第二卷（一八六八年）第三卷（一八七〇年）の刊行である。一八七二年の冬になつて、氏は此の住み馴れた西伯利亞を後にカザンに轉じ、タヽール、バシュキール、キルギス族の學校を監督する地方視學官の任に就いた。

三。カザンの生活は一八七二年から一八八三年迄續いた、此の間は前の西伯利亞時代、後の波得堡時代と比べると、氏の學問上の業績は乏しい時で、職務柄、ヴォルガ兩岸の回教徒の間に、歐洲教育を普及することに精力を費した時代である。然も此の時期に出版されて居る氏の著作十二種の中には、「トルコ國民文學」の第四卷があり、またカザンを去つた翌年卽ち一八八四年に公にされた「西伯利亞より」の第一卷及び、クマン語に關する研究なども、既に此の間に準備されたものであつた。

四。一八八四年に——卽ち氏の四十七歳の時、さうして活動期に入つてから後二十五年目に當る年——氏は露西亞帝國學士院の會員に推されて、一身を全く學問に委ねることが出來るやうになり、こゝに氏の波得堡時代がはじまることゝなつた。此の時期は研究に著述に、旅行に、氏の最も活動した時であつて、一九〇七年には既にその刊行した著述は通じて百を超えて居る。かくして氏のトルコ學に寄與した功績は、世に冠絶するに至つたのである。

此の間以前から繼續した事業としては、「トルコ國民文學」の第五、六、七、八、九、十の各卷が出版されたが、こゝに最も注意すべきことは、此の時期に於て氏の研究が啻に現代のトルコ語學に止まらないで、進んで其の